

平家物語と宝物集

― 四部合戦状本・延慶本を中心に ―

一

宝物集の著者^{著者}平康頼が平家物語の登場人物の一人であり、帰洛後宝物集を著したとの記事をも多くの平家物語諸本が載せるところから、両者の関わりがはやくから問題とされてきたが、両者ともに多様な異本を有し、なお不明な部分が多い。その中であって、渥美かをる氏が四部本灌頂卷「六道」と宝物集の密接なつながりを指摘^{きざ}し、その依拠本文については小泉弘氏が宝物集第二種七卷本系の一本であろうことを説き、研究を大きく進展させた。さらに、考察の範囲を平家物語全巻に広げ、新たに延慶本に注目した武久堅氏によって、第二種七卷本系の中でも身延山久遠寺本系祖本に絞られるところまで論は精密化^{精密化}してきた。すなわち、すでに灌頂卷として特立されている四部本の六道には「その灌頂卷編成に臨んで、改めて宝物集に依拠した、つまり再参照」の可能性があり、「灌頂卷のみの記事を俎上に上せた原拠考ではなく、その特立以前の、しかも全巻に及ぶ本文対照を経て立論される依拠関係の考察」が必要であると説く武久氏は、延慶本の宝物集依拠章句の検討を経て「その関係は、狭く△小原御幸▽もしくは△六道▽の構成内に留まらず、出家に始まる女院往生伝の構成に及ぶ。(中略)恐らく、帰洛後の女院関係の物語は、現存諸本に関する限り、『平家物語』としては延慶

平家物語と宝物集(今井)

今 井 正 之 助

本に溯源の姿を認め得るであろう」と結論し、依拠した宝物集の性格については、身延山久遠寺本(以下、身延山本と称す)系の祖本との近似の可能性を提唱した。

ただし、武久氏はその後「『宝物集』と平家物語の関係は多分に重層的で、一元的説明は成り立ち難い」「現存の延慶本の小原御幸の本文は、その最終加筆期に、かなり積極的な加筆と改作の試みられたものと判定してほぼ誤りがないように思う」と、前稿とニュアンスが違うかに読みとれる発言をしている。四部本、延慶本それぞれの独自依拠章句と、両本に共通する依拠章句とは、依拠宝物集の系統を異にするという本稿の結論も後者の発言に重なる面をもつが、具体的な再検討はまだなされておらず、別に、宝物集を依拠資料とすることを疑問とする意見もあることを考え、私見を提出する。

二

延慶本、四部本の問題の依拠資料を宝物集と確定できるのかどうか。高橋俊夫氏は、延慶本・宝物集両者に酷似する記事の存在を認めつつも、なおその間に微細ではあるが見過しがたい異同のあることを問題とし、当該説話が他の唱導資料にもその俤を伺わせることを傍証として、両者の関係は類似の唱導的資料をそれぞれが別個に

撰取・導入した結果生じた同文現象とみなすべきだと主張している。氏は迦留大臣（後掲の番号①）、紺青鬼（②）、日藏（⑦）を例とするが、紺青鬼・日藏についてはそれらが、同じく宝物集に酷似する他のいくつかの記事（殊に日藏説話の場合は宝物集同巻中の）と併せ、平家物語の同一章段内に隣接して撰取されているという現象をもって、宝物集に非ざる或唱導的資料を想定するよりも、その依拠資料は、未知ではあるが宝物集の或一本である可能性の方が高いといえよう。迦留大臣については氏の使用しなかった身延山本が、宝物集諸本の中では最も高い一致をみせている。

延慶本

④ 昔迦留大臣申ス人ヲハシキ。
遣唐使ニシテ異国ニ渡テ御ワシ
ケルヲ何ナル事カ有ケン、物
イハヌ葉^⑤クワセテ五鉢ニ繪
書額^⑥燈カヒヲ打テ燈台鬼^⑦
名ヲ火ヲトモス由聞ケレハ、其
御子^⑧弼宰相申ス人〔④〕万
里波^⑨凌^⑩他州ノ雲ヲ尋テ見給
ケレハ〔⑥〕燈鬼涙ヲ流シテ
手ノ指ヲ食切テカクソ書給ケル

- ⑧ 我是日本花京客
- ⑨ 汝即同姓一宅人
- ④ 為父為子前世契

身延山本

④ カルノ大臣申ケル人、遣唐使
ニテ渡リ□□ケルヲ何ナル事カ有
ケン、物イハヌ葉^⑤クハセテ
身ニハ繪^⑥書、頭ニハ燈カイト
云物ヲ打テ火ヲトモシテ燈台鬼^⑦
名ヲ付テアリト云事ヲ御子^⑧弼
宰相^⑨申人ホノカニ伝^⑩聞テ万
里波^⑪分テ他州振旦ヲ尋オハ
シテ見給ヒケレハ〔⑥〕鬼涙
ヲ流シテ手ノ指ヲクヒ切テ血ヲ出
カクソ書侍ケル

- ⑧ 我是日本花京客
- ⑨ 汝即同姓一宅人
- ④ 為父為子前世契

① 隔山隔海。情辛恋^{ネシコロナリ}
② 経年流涙蓬蒿宿
③ 逐日馳思蘭菊親
④ 形破他州成燈鬼
⑤ 争帰旧里棄期身
⑥ 是ヲ見給ケム宰相
ノ心中何計ナリケム。遂ニ御門
ニ申請ヲ帰朝シテ其悦ニ大和国
迦留寺ヲ建立スト見タリ。

① 隔山隔海情意恋
② 経年流涙蓬蒿宿
③ 逐日馳思蘭菊親
④ 形破他州成燈鬼
⑤ 争帰旧里棄斯身
⑥ 是ヲ見給ケム子ノ御心イカ斗
歎^キ給ケム。サテ唐ノミカトニ
乞取テ日本国ヘ具^{シテ}カヘリ給
ヘリトソ申タムメル（中略）。
⑦ 大和ノ国ニカル寺ト云所アリ。
彼大臣ノ帰朝ノ後建立ト云リ。

延慶本との関わりにおいて問題となる宝物集諸本の詞章を検討すると大略次のようである。まず、二巻本は⑧①の詩句を欠き、⑩の一文も持たない。元禄本、片活本、一卷本も⑩を欠く。記事全体が対応しうるのは第二種七巻本系のみであるが、光長寺本は⑥に「日本ノ客人来レリトテ、此ノ鬼ヲ取出テミセケレハ」という独自異文が入り、律詩の詩句も①「成祖成子前世契」、④「隔山隔海基情苦」⑫「経年落涙宿蓬蒿」、①「累月馳思親蘭菊」、⑩「何還旧里捨此身」と大きく異なる。吉田本は④を「輕」と宛て（⑩も「輕寺」とする。因に光長寺本は「迦留寺」とする）、⑤「のませて」、⑥「燈台」、①「隔山隔国恋情辛」、⑩「争帰旧里寄斯身」と異なる。ただし、宝物集諸本中この吉田本のみが⑥を欠き、この点は延慶本に最も近い。これらに対し、身延山本は④「給」が「侍」に、⑩「燈鬼」が「燭鬼」という小異及び④を持つという相違はあるものの、総体として最も延慶本に近いといえる。なかでも、①は押韻

（人、辛、親、身）の上から「―恋情辛」がこの詩句の原形と思われるが、延慶本、身延山本が共にこの箇所のみ「―情辛恋」「―情意恋」と語順を誤っていることは、偶然の一致の可能性もあるとはいえ、注目に値する現象であらう。

延慶本の宝物集依拠をなお完全には実証しえない。しかし、宝物集現存本との比較において、小異あるものの大略は細部にわたって一致し、しかも、他にも同様の箇所を多く共有する「唱導的文獻資料」とは結局のところ、宝物集の或古本に逢着するのではなからうか。

四部本灌頂卷六道については、これが「宝物集全篇を貫く仏教教理をふまえて構成されて」おり、「詞章上の関係も著しく宝物集から集団的に引用した場合もある」との、構成・詞章両面にわたる渾美かを氏の指摘を重視して宝物集とのつながりを追認してよいだろうが、なお次の箇所をもって補強したい。

而^レ白居易詞^ニ何^レ日何^レ時不^レ待^ニ出入息再会^一、永^レ隔^テ被^レ

奇^ニ何^レ野^レ辺何^レ山麓^ニ、身体散^ニ在^シ処々^ニ、申^レ欲^スと交^ニ泥魂^一

（後掲の番号L。返り点及び平仮名の送り仮名等は私に補ったものである。）

この前後も宝物集近似的の記事が続いているのだが、右に相当する箇所は宝物集では次のようになっている。

太子、賓客白樂天、人生^レ一^ニ百年、カソフレハ三万四千余日。
其、百年ヲタモツ者ハ百一モナクトナケキ、首楞嚴院、明賢阿闍梨ハ、譬^ヒ八十ノ算^ヲ保^フ人、連日、カソフレハ僅^ニ二万八千余日。

平家物語と宝物集（今井）

況^ニ、中ハ過ナム者、何^レ待^トカセン。何^レ日何^レ時、出^テ入^ルイキ再会^ヲ待事ナク、永^ク隔^テ、何^レ野ノ間^ニ何^レ山ノ麓^ニステラレテ、身分処々ニ散在^シ、泥魂ニマシハラントスラントハ申ツカシ。誠ニ今生、身ノハテ命ヲハリ、イカ、ヲホツカナカラスモ侍ラン。（身延山本）

ところが見るように傍線部は、白居易ではなく、明賢の言葉であり、そのことは明賢の著作「誓願講式」に

設^ヒ有^レ下^ニ持^ツ八十ノ算^一者^上、連日、日算^{カソフレ}纔^ニ二万八千八百七十余日也。況^ニ過^ニ年^一半^一者^上残^ニ命^一無^ク幾^{ハクモ}。（中略）哀哉^ニ何^レ日

何^レ時^ニ於^ニ出入ノ息^一無^ク待^ニ再会^一永^ク隔^テ哉。何^レ野ノ間^ニ山ノ麓^ニ

被^シ奇^ニ、身分処々ニ散在^シ交^ニ泥魂^ニ為^レスラシ塵^ト。

とあることから確実である。従って、四部本の表現は宝物集を依拠資料としそれを誤引したものと判断される。

三

さて、以下本題に入るが、対象とする記事は内容に加えて詞章上の対応をも認められるものに限る。実際には厳格な線引はしがないのだが、たとえば一行阿闍梨（第一末ノ六）、蘇武（第一末ノ卅二）などは除いた。扱うのは次の箇所である。なお便宜上、延慶本は（白帝社刊）活字本、宝物集は古典文庫第二五八冊（吉田本）によって頁数を示す。ただし、「吉田本の巻五・巻六は瑞光寺本等の巻五を二冊に分冊したものであり、巻七、八、九の三巻は、瑞光寺

本等の巻六・巻七を機械的に任意に編成変えしたにすぎないと想像される¹⁰」ことから、漢数字にて示す巻数の下に()内に、第二種七巻本系一般の巻数を補っておく。

延慶本平家物語	吉田本宝物集
Ⅰ第一末廿五「迦留大臣之事」	
① 迦留大臣 (129頁⑨行～130頁②行)	一 38 ⑩～40 ③
Ⅱ第二本八「中宮御産有事」	
② 紺青鬼 (202⑤～⑧)	二 99 ⑨～100 ②
③ 頼通、法華経の効験により延命 (202⑧～⑫)	九 ④ 424 ⑦～425 ⑤
Ⅲ第三本十三「太政入道他界事」	
④ 摩訶止観云々 (498③～④)	二 111 ⑩～⑪
⑤ 俱舍論云々 (498④～⑤)	二 113 ③～⑥
⑥ 炎魔王、使云々 (498⑤～⑧)	二 113 ⑦～114 ③
⑦ 日藏 (498⑧～⑭)	二 88 ①～⑨
Ⅳ第六本廿二「建礼門院吉田へ入給事」	
⑧ 王昭君 (897⑫～⑮)	三 153 ①～154 ①
Ⅴ第六本廿七「建礼門院御出家事」	
⑨ 年少出家の功德 (903⑪～⑬)	四 210 ⑥～⑪
Ⅵ第六末廿三「六代御前高野熊野へ詣給事」	
⑩ 弥陀前生譚 (970⑥～⑩)	八 ④ 404 ⑧～⑩
⑪ 出家菩提心の功德 (970⑩～⑬)	四 193 ⑥～194 ①
Ⅶ第六末廿五「法皇小原、御幸成事」 ¹¹	
。法皇、女院訪問	

⑫ 延喜帝詠歌 (日藏) (972 ⑩～973 ②)	二 88 ①～89 ①
⑬ 諸行無常の偈 (975 ⑤)	二 72 ②
⑭ 極重悪人の偈 (975 ⑩)	九 ④ 436 ⑨
⑮ 一切業障海の偈 (975 ⑫)	七 ④ 332 ④
⑯ 若有重業障の偈 (975 ⑬)	九 ④ 436 ⑧
⑰ 法身体遍諸衆生の偈 (975 ⑭)	八 ④ 366 ①～②
。女院六道語り	
⑱ 四梵士 (981 ⑥～⑦)	二 114 ③～④
⑲ 天上欲退時の偈 (982 ⑨)	三 185 ⑤～⑥
⑳ 修羅闘諍 (983 ⑬～⑭)	二 95 ①～⑥
㉑ 飢饉の憂 (984 ⑧～⑮)	二 89 ⑨～90 ⑧
㉒ 齋掘摩羅 (985 ⑪)	八 ④ 406 ⑧～⑩
㉓ 化預国王 (985 ⑪)	八 ④ 391 ⑥～⑧
㉔ 戒賢論師、阿闍世王 (986 ③～④)	二 107 ⑨～⑩
㉕ 普明王 (986 ④～⑦)	六 ④ 289 ⑩～291 ①
㉖ 術婆迦 (986 ⑫～⑬)	五 271 ⑥～272 ⑥
㉗ 俱那羅太子 (986 ⑬)	五 271 ⑦・273 ④～⑥
㉘ 則天皇后 (986 ⑬～⑭)	六 ④ 274 ①～⑧
㉙ 紺青鬼 (986 ⑮)	二 99 ⑨～103 ⑨
㉚ 志賀寺聖人 (986 ⑮～⑰)	五 268 ④～⑤・269 ①～⑪
㉛ 在原業平 (986 ⑰)	六 ④ 276 ⑤～⑧
㉜ 諸有三千界の偈 (987 ④～⑤)	五 271 ②～④
㉝ 大論の文 (987 ⑤～⑥)	五 272 ⑤～⑥
㉞ 釈尊入滅 (988 ①～②)	三 169 ①～⑨
㉟ 崇峻天皇 (989 ⑥～⑦)	二 132 ⑨～⑩
㊱ 貧女一燈 (989 ⑫～⑬)	八 ④ 355 ①～⑥

③7 東風吹への歌 (990 ④) ⑥)

③8 弓削以言 (990 ⑧) ⑪)

③9 陽貴妃・李夫人 (990 ⑫) ⑬)

VIII 第六末廿六「建礼門院法性寺終給事」

。女院往生

④0 善知識の文 (993 ①)

二 128 ②) ⑩)
一 17 ④) ⑦)
三 161 ⑪) 162 ①)

一方、四部本については、見落しもあるかもしれないが、灌頂巻以外の巻では宝物集に依拠したと思われる記事を見出し得なかった。灌頂巻については、延慶本と重なる記事(四角で囲った番号。ただし、後述のように両本にはまま異同あり)の他、AとZの独自依拠記事をもつ。角番号の下には汲古書院影印本『四部合戦状本平家物語 下』の頁数を、AとZについては同影印本の頁数の下に、吉田本宝物集(古典文庫)の頁数を示す。

。法皇、女院訪問

①6 269 右 6、①4 269 左 1、A (衆罪如霜露の偈) 269 左 2—七(内) 332

5、①5 269 左 3、①3 269 左 4—5

。女院六道語り

①8 275 左 3、①9 277 左 1、B (一人一日中の偈) 277 左 4—6—七(内)

328 2—3、②0 278 左 1—4、C (諸阿修羅等の偈) 278 左 3—二 95

4—5、②1 278 左 6—279 左 3、②2 280 右 2—3、②3 280 右 3、②4 280 左

3—5、②5 (須陀摩王) 280 左 5—281 右 2、②6 281 左 4—5、②7 281

左 5—282 右 1、D (阿育王八万四千人の后を殺す) 282 右 1—2

—三 134 11・四 215 8—9、E (皇女欲近付海人云々) 282 右 2—3

—五 271 6、②8 282 右 3—4、②9 282 右 5—6、③0 282 右 6—左 2、③1

282 左 2—3、③2 283 右 1—3

。女院仏法論議

平家物語と宝物集(今井)

③4₁ 288 左 1—289 右 1、③5 289 左 1—2

F (宗貞少将) 289 左 1—290 右 3—三 163 11—165 3

G (藤原相如) 290 右 3—6—三 156 6—11

H (前少将俊少将) 290 左 1—2—三 159 1—3

③4₂ 290 左 2—6、③9 290 左 6—291 右 1

I (和泉式部) 291 右 2—4—一 45 4—46 1

J (出息不待入気) 292 右 4—5—二 72 8

K (妻子珍宝の偈) 292 左 1—2—二 111 7—9

L (白居易詞) 292 左 2—4—二 80 6—81 1

M (大方流転生死云々) 292 左 4—293 右 4—二 82 8—9・二 84 9

85 1

N (一念發起菩提心の文) 293 右 6—左 1—四 191 10—11

O (闍瑜珈唯識云々) 294 右 2—6—二 64 9—70 9

P (日蔵) 294 左 3—5—二 88 1—9

Q (不持菩提種云々) 294 左 5—295 右 1—二 82 5—8

R (思知人モ在ナリの歌) 295 右 5—6—二 79 10—11

S (一切有為法の偈) 295 左 3—4—二 70 5

T (世中ヲ何譬エンの歌) 295 左 5—二 71 6

V (無言太子) 295 左 6—296 右 2—二 73 4—5

V (此世社思知ヌレの歌) 296 左 6—297 右 1—二 83 9—10

W (無量無數劫の偈) 298 右 1—3—二 69 2—3

X (女人地獄使の偈) 298 右 6—左 2—五 271 3

Y (不軽大士) 298 左 5—299 右 1—八(内) 366 9—10

Z (義孝往生) 302 右 2—左 2—三 159 3—8

。女院往生

④0 305 左 6—306 右 1

先述のように、角番

号で示した記事が両本に共通する。これに対し、延慶本の⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿にありながら、一方にのみ存し、補入か他方の削除・脱落か俄に判定しがたい。これらはさらに検討を要するが、本稿では、延慶本・四部本の独自依拠章句と、両本に共通する

依拠章句とでは性格を異にしているのではないかとの仮説を検証するために、今回は除外し

○延慶本独自記事（宝物集依拠章句）①～⑪…これを α 群と称す。

○延慶本・四部本兩本共通章句 13 16、18 32、34 35 39 40 …

○四部本独自章句F↗Z∴*r*群

この三群の記事・章句を考察の対象とする。

考察にあたっては次の二点に留意したい。

α 群の記事を除き、 $\beta \cdot r$ はいずれも章句の数は多いが、断片的でまとまりに欠け、直ちには依拠した宝物集の系統を確定しがたいこと。

七		四		三	二					一	α
③	⑩	⑨	⑪	⑧	⑥	⑤	④	②	⑦	①	
●	□	/	□	●	▽	/	□	○	⊕	●	身 最光
		○	⊕							▽	
<hr/>											
□	○	○	⊕	□	▽	▽	○	○	□	□	本吉
▽	○	□	□	▽	□	○	○	□	▽	△	元片
△	⊕	□	□	▽	●	□	○	○	▽	△	二
△	○	×	△	×	△	(○)	○	×	⊕	△	一
/	/	▽	▽	×	△	×	×	▽	⊕	△	

七				六		五						三			二						β			
16	14	22	40	23	15	25	31	28	27	26	32	30	19	39	34	35	18	24	29	20	21	13		
/	/	▽	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	身 最 光
												○	○	○							本 吉			
○	○	▽	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	元 片 二 一
○	○	□	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	
×	×	×	○	□	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	▽	□	○	○	
/	/	/	/	□	/	/	/	/	/	/	/	/	○	□	□	×	□	×	▽	□	▽	○	○	

六 Y	五 X	四 N	三 Z H G F				二 K P V M Q L R U J T S O W										一 I	γ				
□	/	□ □	/	/	/	/	○	□	●	△	□	⊕	□	□	□	⊖	○	●	□	□	身 最光	
			□	□	○	○																本吉
▽	○	□	□	□	○	○	○	□	□	▽	□	⊕	□	●	○	(⊖)	□	□	□	□	元片二	
□	○	○	□	▽	□	□	□	○	×	□	▽	□	⊕	▽	○	□	□	▽	○	○	元片二	
●	○	○	□	▽	□	×	×	○	×	●	▽	□	⊕	▽	○	□	□	▽	○	○	元片二	
▽	○	□	▽	△	×	○	(○)	○	×	□	●	▽	×	▽	○	×	(○)	△	○	×	元片二	
/	/	○	◎	◎	・	▽	×	○	×	×	□	×	×	×	○	×	○	▽	×	○	元片二	

加えて、宝物集には多様な異本があり、諸本系統論が確立されていないために大雑把な言い方になるが、それらの本文は相互に複雑な影響関係にあり、いずれの異本も部分的には古態を留めている可能性はある。現存本との比較を通じて依拠宝物集の姿を探るためには、これまでの出典研究の中で平家物語との対応記事数が少ないからと、あらかじめ詳しい検討対象からは除外されていた二巻本・一巻本等の略本と平家物語の記事との関わり方をも看過できないこと。

従って、宝物集諸本との関わり方を全体的に眺め、或傾向性とも呼ぶべき指標を見出し、それを補強材料として依拠宝物集の系統を確定するという方法をとらざるをえない。この意図を容れるため、上記三群の宝物集依拠章句の一つ一つについて、宝物集諸本の異同を調査し、当該依拠章句に近い順に○から△にいたる記事で序列化する。さらにその結果を宝物集（吉田本）の記事構成に従って再配列して示したのが、前頁に掲げる表である。なお、βは共通記事とはいえず、延慶本・四部本兩本の表現には相違も少なくないが、繁雑もあり、全体としての傾向・様相に大差ないと判断し、延慶本による調査結果のみを表示する。

〔凡例〕

。最上段の漢数字一〜七は宝物集七巻本の巻数である。

。宝物集の項、上から順に身延山本・光長寺本（巻一零本）・最明寺本（巻四零本）Ⅱ以上、身延山本系第二種七巻本△仮称▽、本能寺本（巻三零本）・吉田本Ⅱ吉田本系第二種七巻本△仮称▽、元禄本、片活本、二巻本、一巻本を配す。

○□▽△は、○を付した宝物集の表現が当該依拠章句に近く、以下□▽△の順に依拠章句の表現から遠ざかっていることを示す。

平家物語と宝物集（今井）

さらに大きく隔たりをみせる本文もあるが、便宜上△以下の階梯は設けず△に一括した。

●は宝物集諸本中、ある一本（系統）のみが、①は二本が最も当該依拠章句に近い表現をとっている場合に付す。なお、身延山本の記事省略の箇所については、最も近い一本を◎で示した。

◎□▽△など、記号の中に黒点を加えた宝物集は、記事全体としては他諸本にぬきんでて当該依拠章句に近縁性をもつわけではないが、部分的に、最近似の表現をみせているものである。その様子は事項によって異なり、主なものは後述する。

。身延山本の項に付した（）は略述のため、吉田本・二巻本の項に付した（）は吉田本系（狭義。瑞光寺本、吉川本）、二巻本系諸本内に各々異同があるため、最終的な判定を下しえぬもの。×は記事のないことを、／は欠巻（一巻本）・省略（身延山本）を示す。

※

いまαβを一括して延慶本の依拠本文を特定するならば、身延山本が総体として最も近く、前述武久堅氏の「身延山久遠寺本系祖本依拠」想定は極めて適確な判断であったといえる。しかし、αとβ、βとγとはそれぞれ無視しがたい相違がある。

一、身延山本系に最も近似する記事・章句（●）が、αには①③⑧の三箇所、γには○（T）Vの二（三）箇所あるのに対し、βにはそれがないこと。^{註14}

①（迦留大臣）は先に触れたので省略する。

延慶本

身延山本

⑧（巻十一「廿二」建礼門院）
王昭君カ王宮ヲ出テ胡国ヘ行シサ
イツクモ旅ノ空ノ物哀ミテ、モラヌ
マ胡国ノ后トモテナセトモ、ナ

岩屋タニモナヲ露ケキ習ナレハ
御涙ッ先立ケル。ソレニ付テモ
昔今ノ事思召ノコス事ナキマ、
ニハ

ラハヌ旅ノ床露ケク、月ノ光、
ハハヤケレトモ涙ニクラサレテ
クモレリ。(中略)此心ノ詩哥
少々待ッメリ。赤染ノ右衛門

ナケキコシミチノツユニモマ
サリケリフルサトコフルソテ
ノナミタハ

ナケキコシ道ノツユニモマサ
リケル古郷コフル袖ノナミタ
ハ(三一五ウ 74頁)

ト王照君カ胡国ニ旅立テ歌ケンモ理
也トテ更ニ人ノ上トモ思召サ、リ
ケリ

※「ナケキコシ」の歌は宝物集の中では第二種七巻本系のみ
にあり、㊦㊧は傍線部を「なれにし里をこふる涙は」とする。

延慶本と同じく宝物集を依拠資料の一つとする真名本曾我物語
が「ナケキコソ道ノ露ニマサリケレ古郷コウル袖のナミタ」
とする他は、後拾遺集、赤染衛門集も「なれにしさとをこふる
涙は」とある。なお、延慶本は建礼門院の吉田入御を描くにあ
たって、王昭君説話そのものを引用しているのではないため歌
を除く詞章は直接重ならないが、歌の表現の一致を重視して宝
物集依拠記事の一つに数えた。

③又三条院ノ宇治殿頼通ヲ御聳ニ
取ムトセサセオハシマシケルニ
御病付テ大事ニナリ給テ、驗者ニハ
心譽僧部明尊阿闍梨、陰陽師ニハ
賀茂ノ光榮安倍ノ古平ナムトヲメ
シテ音ヲアケテ匍シリケレトモ、

三条院ノ宇治殿頼通ヲ御聳ニ取
ムトセサセヲハシマシケルニ、
御病ツキテ大事ニナリ給テ、驗者
ニハ心譽僧部明尊阿闍梨、陰陽師
ニハ賀茂ノ光榮安倍ノ古平ナムト
力ヲ尽シ声ヲアケノ、シリケレト

只ヨハリニヨハラセマシクテ
引入ラセ給ケルヲ御堂関白道長
公、オハシマシテ日本国ニ法花経
ノ是程ニヒロマラセ給フ我力也、
コノタヒ我子ノ命生サセ給ヘト
テナミタヲ流テ寿量品ヲ一枚計リ
読給ケレハ、御シウトノ具平親
王物ノケニアラワレ給テ、子ノ悲シ
サハ誰モ同シ事ニテコソアレ、我
子ニ物思ワセムコトノ悲シケレ
ハ付奉タレトモ法花経ニカタサ
リ奉テ帰リ侍ヌト宣テ御病止ニケ
リ。

モ、タ、ヨハニナリ給テヒキ入
給ケルヲ、
御堂道長ノオハシマシテ
日本国ニ法花経ノコレ程ニ弘セ給ハ
我力ナリ。此度我子ノ命イケサ
セ給ヘトテ涙ヲ流シテ寿量品ヲ一
枚計読給ヒケレハ、御シウトノ
具平親王物ノケニアラハレ給テ、
子ノカナシハ誰モ同シ事ニテコソア
レ、我子ニ物ヲ思ハセンスルコト
ノ悲シケレハ、ツキ奉リタレトモ
法花経ニカタサリタテマツリテ
返リ侍リヌト言テ御病ヤミ給ヒケ
リ。(七一一一ウ 188頁)

※身延山本は延慶本とほぼ同文であるが、中でも傍線部は宝物
集諸本中、身延山本のみが一致する表現である。冒頭のみを
例示する。㊦「宇治ノ関白頼通ヲ三条院」、㊧「宇治殿関白頼通ヲ三条
院」、㊨「宇治ノ関白頼通ヲ三条院」、㊩「くはんばくよりみち
はぐべいしんわうの御むすめをすてゝ、三でうのゐんの」㊪欠
巻

四部本

〇然聞瑜珈唯識、天台花嚴セモ不
昧シ眼、空觀次第爭可知候。乍
去問セ下事ナレ無伝承処、令申片端
計。先ツ諸法觀空事、一切諸法

身延山本
況ヤ、アヤシノ山カツ争カ申宣侍
ラン。南都ノ修学ニ眼ヲサラサ、リ
シカハ瑜珈唯識ニモ暗ク、北嶺ノ聖
教ニヒチラクタサ、リシカハ止

皆悉空寂^シ、無生無滅無大無小、
被說法華經、可此心。

觀玄義^{ニモ}マトヘリ。(中略)雖
然の中山寺^ニ只且侍^リ諸法^ヲ空
也^ト觀^{スル}仏法^ヲ、大心^トハ甲^ト承^リ
シカ。(中略)山寺^ニ承^リ文^ト少々
甲侍^ルヘシ(中略)一切諸法
皆悉空寂無生無滅無大無小(二
一ウ 28頁)

※傍線部⑤「諸經を空なりと觀ずるこそ」、^(元)⑤①「諸行無常
ヲ觀ルヲ」、①「諸行ハ無常ナリト觀スルヲ」

(T)世中^ヲ何譬^ニ秋ノ田ノホノカニ照^ス宵ノ電^ト云^ハル可此心

⑤世中ヲナニ、譬^ニ秋ノ田ノホノカニテラスヨヒノイナツマ

(二一ニウ 30)

※⑤ほのうへ、^(元)⑤穂ノ上、①①歌全体ナシ。但し、小泉弘氏
「『宝物集』の所収和歌一覽」(『古鈔本宝物集 研究篇』255
頁)によれば、吉田本系の瑞光寺本・吉川本も「ほのか」とあ
り、前掲表吉田本の項も①と表示した。本稿のような微細な点
にわたっての調査には、瑞光寺本・吉川本の披見が欠かせない
が果せなかった。本稿の結論の大勢は動かないと思うが、他日
の補訂を期したい。

V 此世社思^ニ知^ル桜花^ヲサクカトスレハ根

返宛^ニ花藏院法印被読理也

法印元性^{花山院}

此世ヲソ思^ヒ知^ル桜花^ヲサクカ
トスレハ根^ニカヘリツ、(二一
七ウ 37)

※⑤傍線部ナシ、^(元)⑤①①歌全体ナシ。又、宝物集以外に本

平家物語と宝物集(今井)

歌を記載するものが管見に入らなかった。

二、αには⑦、γにはLQ(さらに、身延山本省略箇所であるので
不十分な比較ではあるが、GHZも加えてよいだろう)と、二卷
本、一卷本と関わりのある記事がみられるのに対し、βにはそれ
が見出せないこと。

⑦昔^ニ金峯山^ノ日藏聖人^ノ无言断
食^ニシテ行^ヒスル間^ニ秘密瑜伽^ヲ
鈴^ヲニキリナカラ死^ニ入タル事侍^リ
ケリ。地獄^ニ延喜御門^ニ会^マヒ
ラセタル事アリキ。地獄^ニ来^ル者
二度閻浮提^ニ帰^ル事ナシトイヘト
モ、汝^ハヨミ返^ヘキ者也。我父
寛平法皇^ノ命^ヲタカヘ无実^ヲ以^テ普
原右大臣^ヲ流罪セシツミニヨリ
テ地獄^ニ落^ス苦患^ヲ受^ケ。必^ニ我王
子^ニ語^テ苦^ヲスクフヘシト仰有ケ
レハ、畏^テ承ケルヲ、冥途^ニ罪ナ
キヲ以^テ主^ト、聖人我^ヲ敬^ス事ナ
カレト被仰ケル事コソ悲^シケレ

金峯山、日藏聖人カ无言断食ニ
テ行ナヒシケル程、秘密瑜伽、
鈴ヲニキリナカラ死ニ入タル事侍
ケリ。地獄ニシテ延喜、聖主ニ奉^レ
値ケレハ、帝^ノ聖人^ヲ見^テ言^フ、地
獄ニ来ル者ノ再^ヒ人間ニ帰事ナシ。
汝ハヨミカヘルヘキ者也。我レ父
寛平法皇ノ為^ニ不孝^{ナリキ}。又、無
実ヲモテ菅原右大臣ヲ流罪シタ
リキ。此罪科^ニヨリテ今地獄ニ
ヲチテ苦患ヲウク。必^ニ我王子
カタリテ苦患ヲ弔ヘシト仰有ケ
レハ、畏^テ承ケレハ、冥途^ニ罪無
ヲモテ主^トシトス。聖人我^ヲ敬事
ナカレト仰セラレケルコソ悲^シ
侍。(二一ニウ 39)

※1身延山本とのみ共通表記。⑤「死入侍リケル」、^(元)⑤「死ニ
入タル事アリキ」、①「しにいりたりけるに」、①「カツヘテ
七日アリテヨミカヘリテアリキ」

※2・5二卷本とのみ共通表記。⑤「にして」、^(元)⑤「行て」、

①「にて」〳〵②「今地獄に落てくげんをうく」、③④「今地獄ニ落テ苦患ヲ受也」、⑤「ぢ。ぐくにおちて、くげんをうく」、⑥「地獄ニヲチタリ」

※3・4 一巻本とのみ共通表記。⑦「あひ奉り、御門、上人を見給ひてのたまはく」、⑧⑨「逢奉リケルニ」、⑩「あひたてまつりければ、みかどののたまひける」、⑪「アヒマイラセタルコトアリケリ」〳〵⑫「為に不孝なりき。又」、⑬⑭「御命ヲ背奉リ」、⑮「めいをそむきたてまつり」、⑯「命ヲタカヘ」

⑰而レ白居易詞、何レ日何時不シ待出入息再会、永隔被奇何レ野。⑱何山麓身体散在シ処々、申欲交泥魂。

白楽天（中略）何ノ日何ノ時出テ入ルイキ再会ヲ待事ナク永隔テ、何レノ野ノ間何レノ山ノ麓ニステラレテ身分処々ニ散在シテ泥塊ニマシハラントスラントハ申ッカシ（二一七オ 35）

※①「野のあいだ」、②③「野」、④「野べ」、⑤「記事ナシ」

Q不レ持菩提種、国王大臣貧人、而法華方便品被テ説、見六道衆生貧窮無福恵コソ。

法花經ノ方便品ニ見六道衆生貧窮無福恵申文ハ、六道ノ衆生ヲ見ルニ貧窮ニシテ福ナシ、国王大臣モ貧窮ナル人ナリ（二一七ウ 36）

※⑥「貧窮なる人」、⑦⑧「貧窮」、⑨「まづしき人」、⑩「貧窮ナル人」

G又、藤原相如後栗田関白夢奈良又モ可相君ヲハネラレヌ伊於母歎カサマシ 読深歎悲終死侍リケル。相如娘泣々 夢不見歎キシ君ハ無程又我ニ看ッ悲

※1 ①「アワ田之関白ニヲクレタマツリテ」、②③ナシ、④は記事全体ナシ

2 ④「に」、⑤⑥「失」、⑦「ウセニ」

H又、一条摂政子侍、前少将後少将。一日乍二人煩疣瘡失。

一条院摂政伊勢御子前少将兼賢、後少将義孝とて、時めき給ふ公達おはしき。もがさをわづらひて、おなじ日にうせ給にけり。

Z義孝少将詣世尊寺、唱レ臨終正念往生極楽、終遂往生素懷。其後賀縁阿闍梨、年来契僧夢

△昔契蓬萊宮裏月 今遊極楽界中風 則

△時雨ニ千草花ハ散リマカウ何古ニ袖濡スラン

告耶。実不審事コソ。

時雨とぞ千種の花はふりまがふなに古郷に袖ぬらすらん昔契蓬萊宮裏月 今遊極楽界

※H▽傍線部…㊦「おなじ日に」、㊦「同日」、㊦「はかなく」

㊦「一日之内ニ□□ナカラ」

Z 一卷本のみ四部本と同じくへ詩↓歌▽の順をとる。

別稿で指摘したように、鎌倉時代から室町時代にかけて種々の第二種七巻本系の諸本が輩出したが、それらは二巻本、一卷本との詞章上のつながりの濃淡により、大きく身延山本系、吉田本系に分けることができる。以上述べた二点にわたる $\alpha \cdot \gamma$ と β との相違は、 $\alpha \cdot \gamma$ の依拠宝物集を身延山本系、 β のそれを吉田本系と区分しうることを示すものと思われる。

四

考察の必要上、これまで β 部（延慶本・四部本に共通する宝物集依拠章句をもち、記事構成上も重なる部分）については両本の共通側面にのみ目を向けてきたが、現存本の β 部には、延慶本においては α 部、四部本においては γ 部、それぞれの宝物集再依拠（一回とは限らない）の際、新たに手が増えられた可能性もまた存するはずであり、極めて複雑な様相を呈しているものと予想される。

この点に関わって注目すべき箇所がある。

延慶本	頁 [㊦] 数	宝物集（吉田本）巻頁 [㊦] 数
24 戒賢論師	986 ③ ~ ④	二 107 ⑨ ~ ⑩
25 普明王	986 ④ ~ ⑦	六(五) 289 ⑩ ~ 291 ①
26 術婆迦	986 ⑫ ~ ⑬	五 271 ⑥ ~ 272 ⑥

27 俱那羅太子 986 ⑬
28 則天皇后 986 ⑬ ~ ⑭
29 紺青鬼 986 ⑮
30 志賀寺上人 986 ⑮ ~ ⑰
31 在原業平 986 ⑰
32 諸有三千界云々 987 ④ ~ ⑤
33 大論云々 987 ⑤ ~ ⑥

この箇所は、最後の33を除いては延・四両本に該当記事があり、武久氏の指摘のように、巻五を中心として集中的に宝物集を採択している。が、詞章的に宝物集と重ならない面も多い。

25 昔、普明王ハ班足王ニ トラレテ九百九十九王 ヲ可 ^レ 被 ^レ 誅数ニ入給タリ ケルニ、吾々沙門供養 ノ願アリ。枉 ^テ 暫 ^ク 暇 ^ヲ エ サセヨト申テ八偈ノ文ヲ 誦 ^シ ケレハ即ユルシテ 帰ケルトカヤ。サシモ ノ惡王ソラ情有 ^ト 申伝 タリ。	26 天竺ノ術婆迦ハ后ノ 宮ニ契 ^テ ナシテ墓ナキ夢 地 ^ヲ 恨	27 俱那羅太子 986 ⑬ 28 則天皇后 986 ⑬ ~ ⑭ 29 紺青鬼 986 ⑮ 30 志賀寺上人 986 ⑮ ~ ⑰ 31 在原業平 986 ⑰ 32 諸有三千界云々 987 ④ ~ ⑤ 33 大論云々 987 ⑤ ~ ⑥	五 271 ⑦・273 ④ ~ ⑥ 六(五) 274 ① ~ ⑧ 二 99 ⑨ ~ 103 ⑨ 五 268 ④ ~ ⑤、269 ① ~ ⑪ 六(五) 276 ⑤ ~ ⑧ 五 271 ② ~ ④ 五 272 ⑤ ~ ⑥	むかし、須陀摩王（略）野に出てあそぶ ほどに、遮足王（略）取て、数べき九百 九十九王の中におきつ。須陀摩王なみだ をながし、声をあげていはく（略）野べ に出る時一人のばらもん物をこひつ。今 野べより帰りにあたふべしといひて出 ぬ。（略）いま七日がいとまを得て、婆 羅もんを供養してかへりくべし、といひ ければ、遮足王、七日のいとまをとらせ てけり（後略）。（身延山本略述のため 吉田本を引用） 后ノ網人ニアハムト契 ^ル 事ハ、天竺ニアミウ トアリ、名ヲ術婆迦ト云。（略）思ハサル 外ニ后ヲ奉 ^レ 見テ（略）煩惱ノ思覺 ^ル 時ナシ。 （略）后アハレト覺シテ（略）社頭ヘマ
--	--	---	--	---

27 阿育大王ノ子俱那羅太子ハ繼母蓮花夫人ニ思フ被レ懸ウキ名ヲ流シ

28 震旦ノ則天皇后ハ長文成ニ逢テ遊仙峯ヲ得給ヘリ

29 文徳天皇ノ染殿ノ后ハ紺青鬼ニヲカサレ

30 亭子ノ院ノ女御京極御息所ハ時平ノ大臣ノ女也。日吉詣給ケルニ志賀寺聖人心ヲ奉レ懸今生之行業ヲ奉讓シカハ、哀ヲ懸給テ御手ヲタヒ、実ノ道ノ指南セヨトスサマセ給キ。

イリテアミ人ニアハント契リ給事ナリ。
女ハ不^キ嫌^ハ貴賤^ヲ但欲是随^ト云ハ是ナリ。細カニハ大論ニ見タリ。

俱那羅太子のまなこをくじると云は、阿育王のきさき、まゝ子のくなら太子をおもひかけ給ふを、太子かたく辞し申給ふによりて、ふたつのまなこをくじり給ふ事なり。(身延山本略述のため吉田本を引く。)

振旦(略)則天皇后ハ玄宗ノ后ナリ。長文成ニアヒ給テ、イウセンクツト云文ヲエタマフ事ナリ

染殿后^キ(略)南山^{ヨリ}貴^キ聖人^ヲ一人尋^ネ出サレタリケルヲ(略)聖人南山ニ移^リ紺青ノ色シタル鬼トナリテ頭テ、后ヲ犯奉^ル。后ノ御目ニハ、我ヲツト文徳天皇ト見エ給ケル。

滋賀ノ聖人ハ京極ノミヤス所ノ滋賀寺ハ参^リ給^リ見^テ御手ヲトラヘテ
ハツハルノハツネノケフノタマハ、キ手ニトルカラニユラクタマノヲ
トヨミテ今生ノ行業ヲユツリタテマツルトソ申ケル。

しかも、右のような素材をまとめて提示することは宝物集に限ったことではないらしい。後出の作品ではあるが『三国伝記』巻第六第廿七「志賀寺聖人恋路事」に次のようにある。

和云、志賀寺上人ニ云、聖アリ。京極御息所ト申シテ、時平左大臣女、比叡参^リシ給^{ケル}道ニテ見合、御手ヲトラヘ奉^リテ、
初春ノハツネノ今日ノ玉簪手ニトルカラニユラグタマノ緒此ノ歌家持ノ集ニ有^リト詠^{ジテ}、多ノ行業ヲ讓^リ、忽^ニ紺青鬼ト成^リケルコソヲソロシケレ。月氏^ノ述婆伽ハ妃ヲ恋テ火焰ト成^リ、震旦ノ則天后ハ張文成ニ心ヲ傷^シ給^フ。春駒ノ身ヲ毀^ヒ、秋ノ鹿ノ命ヲ失^フ、皆是此ノ道ヨリ起^ル。可^レ恐^ル可^レ慎^ム也。

ここには26術婆迦、28則天皇后、29紺青鬼、30志賀寺上人、の四素材が集合している。加えて「比叡参」が「日吉詣」の転化とすれば、一層何らかの関わり(平家物語と、三国伝記の依拠資料との)が想定されるところである。しかし、それ以外には宝物集より以上に平家物語に近い表現は見出せず、三国伝記は志賀寺上人が紺青鬼になったと記すなど、その依拠資料に溯つても、平家物語との直接的な関係はほとんど考えられない。逆に、宝物集は2829が平家物語の詞章にはば重なり、26の「后」「契リ」という表現が一致する他、30においても(「滋賀寺詣」とし、「実ノ道ノ指南セヨ」の歌を載せないなどの相違があるものの)、狂言『枕物語』や、「実ノ道」の歌を伝える『後頼髓脳』などの歌論書及び『天正本太平記』などには見出せない「今生ノ行業ヲユツリタテマツル」という表現を、平家物語と共有する。従つて現段階では、宝物集以外の資料の可能性もなくはないが、宝物集の或古本(前項での結論からすれば吉田本系古本)に他資料を併せ用いたとみておくのが穏当なところである。

う。^{註19}

以上の26282930は延・四両本に大異なく、共通祖本段階にかかわる問題と思われる。ところが、25の主人公を「普明王」、彼の供養の対象を「沙門」とし、さらに「八偈ノ文」に言及する点において延慶本は宝物集と対立し、三国伝記巻第二第七「斑足王欲ニ千王ヲ殺シ事」に近いのである。三国伝記と類似の話は、原典の仁王経の他、流布本『首我物語』巻七、『埴葉抄』巻七・二十七にもみえる。しかし、27の俱那羅の実母ならぬ継母の名を「蓮華夫人」とする点については、池上洵一氏（『三国伝記』巻七補注四）が詳しく述べるように、三国伝記巻第七第四「俱那羅太子事」の他には見当たらない。

一方、四部本の2527は延慶本と大きく異なり、25では主人公は「須陀摩王」としている。

㊦戒賢論師不可申凡夫、玄奘三蔵師。阿闍世王非只人、靈山聴衆。回雖然、有加九百九十九王流涙、乞暇被飯。是無類班様苦。

㊧昔須陀摩王、后妃采女被取足王。置足王情、是少無情、無弥重事。

いま仮に㊦㊧㊨三つの部分に分けたが、㊦は先に24とした部分で、延慶本もほぼ同様の文章である。問題は㊨の部分である。文章の流れからいけば㊦のみが25相当記事のようであるが、内容上㊨も25の一環をなすと思われる。しかも、斑足王にとらわれたのは須陀摩王自身のはずが、四部本では「后妃采女」のことと読める（須陀摩王と后妃采女とがとらわれたとも読めなくはないが、これも問題を残す）。主人公の名を「須陀摩王」とする点、「流涙乞^{補注1}暇^レ」の表現などにおいて宝物集に近いのであるが、現存の四部本の詞章には相当の混乱があるといわざるを得ない。いま一つの27は次のよう

である。

㊦阿育大王后、思懸^レ繼子、蓮花夫人。子俱那羅太子^ニ不聞^下は恨^レ事^ヲ、取^ニ上げ齒印^ヲ、抜^ニ両眼^ヲ。㊧依之大王亡^下モ八万四千人后^ヲ淺猿^{カリ}。㊨又皇女欲^レ近^ニ付海人^ヲ、皇后親^ニ下^リ馬下^カ子^ニ御事^{ナリ}。（返り点及び平仮名を私に補った）

四部本はみるように「蓮花夫人」を実母の名とし、さらに「齒印」にふれるなど、延慶本のみならず宝物集にもない表現をとる。この「齒印」は阿育大王の齒印であり、四部本の表現は誤解を招くまでに簡略化されている。D・Eは四部本独自記事であるが、Dにいう阿育大王が后を殺したのは、俱那羅譚とは別の話で、宝物集では27が巻五273頁（吉田本）、Dは巻二134頁・巻四215頁に、それぞれ掲出されているものである。Dについてはいま措くとして、Eは宝物集における術婆迦譚（26）の題目提示の一文「皇后ハアミ人^ニアハムト契^リ、王女^ヲ馬下^ノ児^ニ縁^ヲ結^ヒ」（身延山本）に関わりがある。従って、武久氏が四部本に宝物集再参照の可能性を想定したのも、こうした様相を思えば、もっともなことであった。

しかし、現存四部本の記述に混乱があることの指摘は、四部本が祖形を全面的に改めてしまったことを、延慶本が祖形をそのまま保持していることを意味しない。27の俱那羅譚における「齒印」は、三国伝記では「手印」となっており、池上氏（『三国伝記』補注四）によれば「『今昔』以前の話では王の齒印（粘土で封をした上に封じる人の齒形をつけたもの。インドの風習だった）と語られていた」とあり、四部本がこうした、表現としては古い形を受けついでいることに注意したい。また、25の須陀摩王についていえば、須陀摩王とするものは『智度論』巻四に端を発し（『織田仏教大辞

典』）、『三宝絵詞』、『金沢文庫本仏教説話集』（碧沖洞叢書四ウ）、宝物集、『平家族伝抄』（汲古書院影印本。366左⑦⑧）などに、延慶本のように普明王とするものは『仁王経』にはじまり（『織田仏教大辞典』）、三国伝記、流布本『曾我物語』、『墮囊鈔』、『玉藻の草子』などにみえる。管見の及ぶ事例が予想され強弁しえぬものの、須陀摩王系の宝物集の中でも、早くとも室町期以降の成立と思われる元禄本が記事の最後に「仁王経ニ見ヘタリ」と付言していることも併せ（平家族伝抄にみるように、須陀摩王系があとを絶つわけではないが）、次第に普明王系が一般的になっていったという傾向が窺えよう。すなわち、四部本の表現には大きな混乱がみられるが、素材としての記事内容そのものは、延慶本よりも古い形を留めている可能性がある。

一方、延慶本編者の手許には身延山本系祖本宝物集の他に、三国伝記の依拠資料に近い（或は、何らかの関わりをもつ）資料があり、これによる記事の補訂をも行なっているのではないか^{註21}。

このように断定するにはなお材料に乏しく、別の解釈の余地もあるが、四部本のみならず、延慶本のβ部にもやはり改訂の手が加わっている可能性が濃く、両本ともにβ部はきわめて複雑な様相を呈しており、それは一回性の依拠や転写による単純な誤写では説明のつかないものであることを確認しておきたい。

五

以上、平家物語諸本成立のある段階で、宝物集吉田本系古本（仮称Ⅴ）を一資料として灌頂巻（相当記事）を形成した本^{ヲモエ}があり、その本を基に、延慶本、四部本は身延山本系古本（本稿では「祖本」

との用語の使用は留保しておく。また、延・四両本の依拠宝物集が同一かどうか不明）を新たな資料として、前者は全巻に及んで（清盛、女院、維盛の記事がその過半を占める）、後者は「六道」に集中的に補訂の筆を加えたものを思われることを論じてきた。

武久氏後稿は「現存の延慶本の小原御幸の本文は、その最終筆期に、かなり積極的な加筆と改作の試みられた」、「『宝物集』に依拠した本文の加筆もその一つであろう。しかもその改作時に、基盤となった（長門本との——今井注）共通親本以外に、もう一つの小原御幸の本文を参照しているように思う。その本文の性格を知る上で有効なのが四部合戦状本の灌頂巻である。」「現存本（四部本——今井注）との直接の親子関係の判定はむづかしいが、或るいはその元となった親本の女院六道語りの本文を大幅に採用して、現存延慶本の最終加筆改作が試みられたのではあるまいか。」と述べる。はじめにも断つたように、氏のこの発言と本稿の結論とは重なる面もある。ただし、氏の論は全巻にわたる「延慶本最終加筆の輪郭と特徴」の解明をめざしてのものであり、本稿の課題からすれば、延慶本が参照したとされる四部本の「親本」における宝物集依拠の実態、また、それと現存四部本の詞章、及び「身延山久遠寺本系祖本」による現存延慶本の加筆改作とがそれぞれどのような関係にあるのか、なお不分明に思われ、私見を試みたわけである。

また、宝物集依拠句にかかわっての発言ではないが、水原一氏は延慶本、四部本の関係を「四部本はそうした（現存延慶本との差は主として量的な——今井注）旧態延慶本の別途増補本（現存延慶本と兄弟関係になる——原注）に依拠しつつ、表記・編成を改変し略述した」ものとみている^{註22}。たしかに四部本にはその母胎に延慶本のような

な本文を想定しないと説明困難な箇所があり、稿者も先学の驥尾に付してそれを論じたことがある^{註23}。が、少くとも宝物集依拠という窓を通してみる限り、四部本の母胎を現存延慶本の兄弟本といえるかどうかには、なお検討の余地があるように思う。いづれにせよ、四部本・延慶本両本に限り、しかも宝物集との関わりを採ったにすぎない本稿としては、延慶本、四部本のどちらが共通祖本の性格を濃厚に受けているのかといった推論は慎しみ、

「四部本灌頂卷」の「大原御幸」「六道物語」「女院往生」の叙述と、「延慶本」第六末の「法皇小原へ御幸成ル事」「建礼門院法性寺ニテ終給事」とは、相互に共通する祖本を原拠にして、それぞれが別個に潤色添加を企てた姿が遺存しているものであると推測したい。

との佐々木八郎氏の発言を裏付けたものとして、自らを規定しておきたい。

以下は私自身の反省としてであるが、これまで、延慶本の古態性をいうのに急で、その引きあいとしてのみ四部本を論う嫌いがあったように思う。延慶本古態論による洗礼を受けた四部本にも最近再評価の気運がみえ、今後は単なる優劣論を超えて、両本の特質が明らかにされていくであろう。本稿はそうした階梯への捨石でもある。

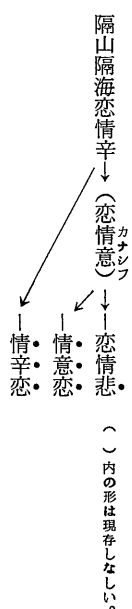
〔使用テキスト〕平家物語Ⅱ四部合戦状本（四部本と略称。汲古書院影印本）、延慶本（汲古書院影印本）。宝物集Ⅱ一卷本（統群書類従所収）、二巻本（『校合二巻本宝物集』碧冲洞叢書。北大本（国文学研究資料館より複写頒布を受く）を参照。なお、平仮名古活字三巻本、平仮名整版三巻本も大異なく、二巻本グループ

平家物語と宝物集（今井）

プとして一括した）、片仮名古活字三巻本（片活本と略称。静嘉堂文庫蔵本。複写頒布いただいた写真による）、第一種七巻本（元禄本と呼ぶ。名大小林文庫蔵本。国文学研究資料館より複写頒布いただいた写真による）、第二種七巻本―吉田本（古典文庫258）、身延山本・光長寺本・本能寺本・最明寺本（小泉弘氏編『古鈔本宝物集』角川書店）。

注

- 1、麻原美子氏「宝物集の世界」『日本の説話3中世』（東京美術 昭48・11）は編者とみる。
- 2、「四部合戦状本平家物語灌頂卷「六道」の原拠考―宝物集との関係を中心に」『軍記物語と説話』（論文初出 昭44・12）
- 3、『古鈔本宝物集研究篇』（角川書店 昭48・3）
- 4、「『宝物集』と延慶本平家物語―身延山久遠寺本系祖本依拠について」人文論究（関西学院大学人文学会）25の1 昭50・6
- 5、「平家物語読み本系諸本の成立過程―延慶本・長門本から源平盛衰記へ」国語と国文学55の1 昭53・1
- 6、「延慶本平家物語説話攷―宝物集との関係をめぐって（上）（中）―」国学院雑誌76の11（昭50・11）、77の7（昭51・7）
- 7、一卷本、片活本に「隔山隔海恋情悲」という形があることを考えると、



このような展開過程を想定することが可能で、この場合、身延山本と現存延慶本の語順の類似は偶然の一致となる。ただし、延慶本「情辛恋」の

訓は「隔山隔海基情苦」(光長寺本)などとのつながりも考えられ、さらに検討を要する。

8、引用は山田昭全氏「明賢作『誓願講式』をめぐる一報告並びに翻刻」(日本仏教史学15 昭54・12)。同論文は宝物集のこの部分が『誓願講式』によっていることを明示している。

9、この検出には、武久堅氏をはじめ、後藤丹治氏(『改訂戦記物語の研究』初版 昭11)、富倉徳次郎氏(「平家物語の灌頂巻について」国文学踏査5 昭33・11)、渥美かをる氏(注2)、佐々木八郎氏(「平家物語の達成」135頁。初出 昭46・7)、小泉弘氏(注3)、高橋俊夫氏(注6)ら諸先学の指摘に多くを負っている。私が新たに加えたのは⑩⑪⑫⑬に過ぎない。

なお、武久氏の指摘にかかるもののうち、○定基入寂の折の詠詩歌(975⑮)⑯⑰⑱⑲⑳については、詩の一節「草庵無人扶病臥」を宝物集は「荒(茅)屋無人扶病起」とし、「雲ノ上ニ」の歌も載せないなどの相違があるところから、○「天人ノ五衰相現ノ悲」(982⑳㉑㉒)についてはむしろ『六道講式』を典拠とすべきと考え、○「王昭君カ王宮ヲ出テ胡国ニ赴テ十九年マテ歎ケムモ」(990㉓㉔㉕)については、宝物集ほかの王昭君譚に傍線部の表現見当たらず、或いは蘇武譚の「十九年」が混入しているかと思われ、いずれにせよ一次的な宝物集参照とは考え難いなどの理由によって、いくつかを(いずれも宝物集と全く無縁とは言えないものの)を除外した。ただし、これらを加えても考察の結果には影響しない。

また、和歌についても宝物集から引用した可能性があるが、ごく近い範囲内に宝物集依拠と目される記事を伴っている場合を除いてはとりあげなかった。和歌については武久氏のほか、深沢亨氏「『宝物集』と『平家物語』に於ける和歌の一考察」(駒沢大学大学院国文学会・論輯7 昭54・3)がある。

10、小泉弘氏『古鈔本宝物集 研究篇』36頁。

11、論述の都合上、灌頂巻(相当記事)の記事構成を小見出しとして示す。後掲四部本の項「・女院仏法論議」は一部、延慶本と詞章が重なるが、記事構成上は四部本独自のものである。この現象については別に論じる予定である。

12、四部本の宝物集依拠句は、渥美氏(注2)、小泉氏(注3)の指摘にはば尽されているが、WとYを加えた。小泉氏指摘のうち、「成月鼠心擬羊歩」(292右一三139⑩)、「蝸牛角上有幾葉」(292右一八638⑪⑫)、「而大論：大敦故申」(295右一三181⑬⑭⑮)、「多田満仲」(302右一八412⑯⑰⑱)は詞章上の隔たりが大きいと判断し、今回は除外した。

なお、四部本を含む平家物語諸本の「山門滅亡事」(寛一本巻二、四部本巻三)に、宝物集にかかわりがあるかにも見える記事があるが、木下資一氏「『選集抄』―その唱導の共通本文をめぐる一」(中世文学24 昭55・3)は問題の記事の依拠資料を「現存しない『宝物集』の古本である可能性をも含めつつ、『宝物集』と極めて近い位置にある一唱導資料とのみ、定めておきたい」と慎重な態度をとっている。本稿もこの箇所については留保したい。

13、B・Cの偈は延慶本の脱落、D・Eは四部本の補入・改変(後述)の可能性が高い。⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿は一応宝物集依拠句としたが、歌を除く前後の記事に些か隔たりがあり、著名な話柄でもあり、別の典拠をもつものかもしれない。

14、逆に、βには吉田本系に近い表現を持つ記事がある。㉞は総体としては元禄本、片活本に近いが「我夜生五子随生皆自食(昼生五亦然雖尽而無飽)」との偈の傍線部をも載せるのは、吉田本(系)のみである。ただし、吉田本の表現にも「昼生其亦然雖尽而不飽」と小異ある。

15、「『宝物集第二種七卷本系』考―他系統本文との関わり―」(名古屋大学国語国文学54 昭59・7)。ただし、拙稿でも言及したが、二巻本・一巻本とのつながりを見せる章句を持つ作品の場合も、吉田本に最近似的章句を全く持たないわけではない(統教訓鈔、平家族伝抄)。γ部のUの存在をもうした類と考える。U而レ無言太子八十歳ニ不物モ言、不レ預十善

位。祈殿昌太子七度辞位観諸行無常故

④無言太子ノ十歳マテ物ヲ不レ云、十善ノ主トナラシカ為、別成王子ノ七度聖教主ヲ辞セシ皆諸行ヲ無常也ト観メシナリ。(傍線部、吉元、(H)⑤いづれも「位(くらゐ)」とする。)

16、引用は池上洵一氏校注『三国伝記』(上)(下)(三弥井書店 昭51・昭57)。本書の頭注・補注に多くの恩恵を蒙った。

17、宝物集のほか、『俊頼髓脳』などの歌論書が「志賀寺」とし、『太平記』が「志賀ノ花園」とし、「日吉詣」とするものは少ない。ただし、『枕物語』には「日吉詣」とある。

18、真済もしくは南山聖人の紺青鬼譚と志賀上人の話の「混合・付会」(『三国伝記』巻六補注一七)の可能性は、築瀬一雄氏『説話文学研究』(三弥井書店 昭49)182頁が指摘するように、無住の『妻鏡』にも「志賀寺の聖人は三密の行に功を運しかども、一念の妄心に依て、青鬼と成と云り」(岩波大系『仮名法語集』166頁)とあり、「和談鈔」に「彼ノ天竺ヲ述婆伽ハ后ヲ恋テホムラトナリ、我朝ノ上人モ其下モエヲ志賀寺ヤラモキカ上ノサヨ衣、アラキ鬼ト成ニケル」と見える」との黒田彰氏「『三国伝記』と『和漢朗詠集和談鈔』(二)」(国文学59 昭57・12)の指摘もあるなど、仮にそれが「混合・付会」によるものであったとしても、『三国伝記』の依拠資料の段階で既に発生していたと思われる。

19、β部の依拠資料が宝物集でないとしても、α・γ部との相違が首肯されれば本稿の主旨にはゆるぎない。

20、源平盛衰記、大島本の宝物集依拠についても別に論を立てる必要があるが、この俱那羅譚の記述に少しふれておく。

㊦阿育大王の鳩那羅太子は八万四千の后を亡し給ひける。

㊧あいく大王ハ八万四千の后をはるほし

盛衰記は㊦とDとを混成しており、四部本のような記述が先行形態として想定される。大島本はDのみを記すが、畜生道について述べる物語の場面とは無縁で、これも四部本もしくは盛衰記のような先行本文の想定される

平家物語と宝物集(今井)

ところである。

21、牧野和夫氏「孔子の頭の凹み具合と五(六)調子等を素材にした二、三の問題」(東横国文学15 昭58・3)は、現存延慶本への編纂過程に参画した基層に、根来寺伝法院方のみならず、「鎌倉後期・末期頃に叡山と琵琶湖周辺の天台系寺院(阿弥陀寺・安楽寺、又比良山系につらなる諸社)を往還して活動した人記家」(義源・光宗等を代表とする)の学問や収集資料(各地の寺社の縁起類等)が、直接・間接のいかんを問わないならば、関与していた可能性のあること」を説く。そして、この琵琶湖周辺の寺院は『三国伝記』や『和漢朗詠集和談鈔』等をも生み出した共通基盤を形成しているという。小稿に想定した、三国伝記に何らかの関わりをもつ、延慶本の依拠資料もそうした「近江琵琶湖周辺の地縁関係に基く共通資料」の一つかもしれない。

22、『延慶本平家物語論考』(加藤中道館 昭54・6)141頁。

23、拙稿『大塔建立』と『頼豪』―延慶本平家物語の古態性の検証―(長崎大学教育学部人文科学研究報告29 昭55・3)。「嘉応相撲節・待宵小侍徒―延慶本平家物語の古態性の検証・統一」(同上30 昭56・3)。

24、『平家物語の達成』(明治書院 昭49・4)136頁。

25、高山利弘氏「四部合戦状本平家物語論―巻十一巻末部をめぐる―」(名古屋大学国語国文学52 昭58・7)、「平家物語巻十二「義憲最期」考―形成と方法をめぐる―」(語文論叢11 昭58・9)。佐伯真一氏「四部本平家物語試論」(軍記と語り物20 昭59・3)、「『平家物語』の『愚管抄』依拠―四部本研究の予備作業として―」(帝塚山学院大学研究論集18 昭58・12)。谷口耕一氏「四部合戦状本平家物語の素姓」(語文論叢11 昭58・9)。早川厚一氏「四部合戦状本平家物語真字表記論考」(国語と国文学61の9 昭59・9)。「延慶本平家物語発端部論考―読みかえと説話構成をめぐる―」(日本文学33の9 昭59・9)など。

補注1 脱稿後、高山利弘氏「四部本平家物語に関する試論―失われる「読み」をめぐる―」(語文論叢12 昭59・9)に接した。高山氏は、この

部分に四部本の錯行（傍線部）を指摘し、「…雖^レ然有^二加^一様苦」。昔、須陀摩王、后妃采女被^レ取、班足王置^二九百九十九王（内）^一、流^レ涙乞^レ被^レ販。是无類班足王情、是少無情…」となるべきだとする。これにより、現存本の混乱は大幅に解消されるが、「須陀摩王は后妃采女を取られ…」と読みうる部分にはなお、本稿で指摘したような問題が残る。

付記：本稿は中世文学会昭和五十八年度秋季大会（於愛知大学）での研究発表をまとめたものである。席上、事後にご助言たまわった諸先生方に御礼申し上げる。また、宝物集・平家物語諸本の公刊、研究の積み重ねがあつてはじめて、今回の作業もありえた。先学の学恩に深謝する。複写頒布をお許しいただいた静嘉堂文庫、国文学研究資料館及び関係各位にも併せて厚く御礼申し上げる次第である。

（昭和五十九年十月三十一日受理）